

## 乳・幼児の歌唱能力の発達に関する一考察Ⅲ ～ 音程の分析を通して（1）～

A Study on Development of Singing Capability in Early Childhood Vol. III  
Through Analysis of Interval Survey (1)

武田道子・加藤明代\*  
Michiko TAKEDA・Akiyo KATO\*

（平成18年10月2日受理）

### はじめに

前回まで、1歳児から年長児の歌唱能力の発達について、声域～発声に焦点を当てて明らかにしてきた。

さて今回は、歌われた歌の音程の精査を通して歌唱能力の発達に迫るものである。

歌い始めから歌い終わりまでの音程（旋律音程）を詳細に分析し、乳・幼児期の歌唱指導の手がかりを得ようとするものである。なお、本論では、1歳児・2歳児・年少児が対象である。続く年中児・年長児については次回を予定している。

歌唱能力、特に音程の側面から、日本語を話す子どもたちを対象にした先行研究では、大畑祥子（1987）の研究がある。対象者数等は明記されていないが「2歳児は、歌詞とリズムが比較的正確な例と、歌の動機を断片的に歌い歌詞も不正確な例がある。3歳児では、連続的進行の曲は比較的正確である。跳躍音程を含む曲は、上昇音程は低く、下行音程は高くなり中心に寄せられる。」<sup>(1)</sup>とし、さらに4・5・6歳児までのおおよその発達の流れを追っている。また森きみえ（1989）は、3・4・5歳児を対象に音程を含めたリズム感覚や感情表現などを総括して歌唱表現能力に迫っている。さらに長澤佳子（1990）らは、年少児を対象にピアノ伴奏を伴った歌唱における音程の分析をしている。また志村洋子（1980）は、年長児を対象として特に声域との関連から音程の分析をしている。しかし、筆者らの知る限り、乳・幼児の歌い始めから歌い終わりまでの音程を詳細に分析した最近の研究資料は見当たらないというのが現実である。その意味からも本研究は現代の乳・幼児期の歌唱能力の発達という観点から一つの資料を提供できるものと考えている。

---

\* 常葉学園短期大学

## I 方法

### 1 対象

静岡県内公立、私立保育園

1歳児 10名(男・女混合)

2歳児 47名(男・女混合)

年少児 297名(男 158名・女 139名)

### 2 調査実施日

2002年7月

### 3 手続き

課題曲 とんぼのめがね(額田誠志作詞・平井康三郎作曲)ハ長調

歌を覚える指導と録音は担任に依頼した。収録は個別に実施し、まず名前を言ってから伴奏なしで自由に歌うという方法をとった。音程の分析にあたっては、歌われた歌の音高をピアノで再現して記録した。

## II 結果

集計は、小数点2位以下四捨五入とした。また、保育園での歌唱活動はクラス集団で行われるのが通例である為に、男女混合である。

以下は、音程の流れとして分析した箇所である。

楽譜1 音程分析の視点

「表2(1ブロック)」 「表3(2ブロック)」 「表4(3ブロック)」 「表5(4ブロック)」  
「長3」 「長2」 「短3」 「長2」 「完4」 「短3」 「長2」

とんぼのめがねはみずいろめがね あおいおそらを

「表6(5ブロック)」 「表7(6ブロック)」 「表8(7ブロック)」  
「長2」 「短3」 「長2」 「完4」

とんだから とんだから -

譜1に示すように、分析は特に上行長3度～下行長2度、上行または下行短3度～長2度、フレーズの区切り、上行完全4度に焦点を当てた。これは、子どもたちの即興表現の中で、またわらべ歌遊びの中で、更に幼児の歌唱教材の中にも頻繁に現れる音程でもある。

さて結果について、1歳児は対象児(10名)ひとりひとりの実際の音程の表れをそのまま表1にまとめた。従って、表1に示した数値は半音数である。続く表2以降の2歳児・年少児については、ブロック毎にそれぞれの音程の表れを半音数で示し、数値は人数と割合である。

表1 1歳児の歌い始めから歌い終わりまでの音程の表れ

1ブロック		2ブロック		3ブロック	4ブロック		5ブロック	6ブロック		7ブロック
長3度	長2度	短3度	長2度	完全4度	短3度、長2度	長2度	短3度、長2度	完全4度		
(4)	(2)	(3)	(2)	(5)	(3) (2)	(2)	(3) (2)	(5)		
4		?		5	3 2	↓1	3 2	5		
4	?	3	1	3	3 2	↓1	3 2	4		
3	2	?		1	1 ?	↓1	2 1	1		
3	1	2	1	1	2 2	1	3 2	3		
3	2	2	2	5	3 2	?	? ?	?		
3	1	2	1	5	3 2	2	3 2	2		
0	0	0	1	?	? ?	?	1 0	3		
3	1	2	0	4	5 0	1	1 3	1		
?	2	1	2	4	3 ?	0	2 2	2		
3	1	1	1	0	2 9	2	3 2	2		

表2 (1ブロック)上行長3度~上行長2度

半音数	2歳児		年少児	
	(%)	(人数)	(%)	(人数)
4-2	23.4	11	35.4	105
3-1	27.7	13	26.6	79
3-2	27.7	13	16.8	50
2-2	2.1	1	3.0	9
2-1	4.3	2	3.0	9
4-1	0.0	0	3.0	9
その他	14.9	7	12.1	36

表4 (3ブロック)上行完全4度(フレーズの区切り)

半音数	2歳児		年少児	
	(%)	(人数)	(%)	(人数)
5	8.5	4	9.4	28
4	12.8	6	16.8	50
3	12.8	6	20.2	60
2	34.0	16	25.6	76
1	19.1	9	14.1	42
0	0.0	0	8.1	24
その他	12.8	6	5.7	17

表3 (2ブロック)上行短3度~上行長2度

半音数	2歳児		年少児	
	(%)	(人数)	(%)	(人数)
3-2	25.5	12	30.6	91
3-1	21.3	10	8.8	26
2-1	14.9	7	18.5	55
2-2	14.9	7	15.5	46
1-1	8.5	4	10.4	31
1-2	2.1	1	7.7	23
その他	12.8	6	8.4	25

表5 (4ブロック)下行短3度~下行長2度

半音数	2歳児		年少児	
	(%)	(人数)	(%)	(人数)
3-2	17.0	8	21.2	63
3-1	10.6	5	7.1	21
2-2	10.6	5	7.1	21
3-0	8.5	4	7.1	21
2-1	6.4	3	3.4	10
4-2	4.3	2	3.7	11
4-0	2.1	1	8.8	26
4-1	0.0	0	6.7	20
2-0	0.0	0	4.0	12
5-0	0.0	0	3.4	10
その他	40.4	19	27.6	82

表6 (5ブロック)上行長2度(フレーズの区切り)

半音数	2歳児		年少児	
	(%)	(人数)	(%)	(人数)
2	38.3	18	35.4	105
1	31.9	15	23.6	70
0	19.1	9	16.8	50
3	4.3	2	11.1	33
4	0.0	0	5.7	17
その他	6.4	3	7.4	22

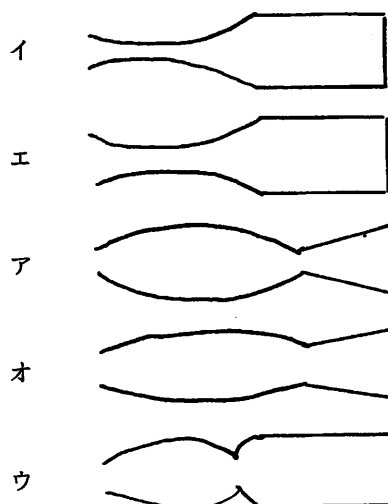
表8 (7ブロック)上行完全4度(曲尾)

半音数	2歳児		年少児	
	(%)	(人数)	(%)	(人数)
5	10.6	5	12.8	38
4	14.9	7	16.5	49
3	12.8	6	15.5	46
2	38.3	18	37.4	111
1	17.0	8	15.5	46
その他	6.4	3	2.4	7

表7 (6ブロック)上行短3度~上行長2度

半音数	2歳児		年少児	
	(%)	(人数)	(%)	(人数)
3-2	38.3	18	39.4	117
3-1	19.1	9	5.4	16
2-2	17.0	8	18.9	56
2-1	6.4	3	12.2	36
1-1	6.4	3	6.1	18
1-2	4.3	2	6.7	20
その他	8.5	4	12.1	34

図1 声道の形態



### III 考察

#### 1歳児

1歳児は、保育者の歌に支えられて優しい声での唱和が中心の姿であった。その中から、なんとか最後まで歌っている事例についてのみを取り上げている。その為に10事例だけであった。しかし、この事例の中でも歌の途中の音程が1~2ヶ所であるが判定できない所があった。それについては表1の中で「？」の記号で示している。

1歳児は、歌唱技能についてはまだまだ未熟である。まして対象数も10事例である。従ってここでは表れた結果を精査するにとどめ、1歳児の実態の参考にしたいと考えている。

さて表1に見るように、1ブロックの上行長3度の跳躍は、4半音上がりきれず3半音で止まり、続く下行長2度は1半音また2半音でまどまっている。これは、大畑の言う中心に寄せられるとした結果と同じであると考えられる。すなわち『トンボ』という“トン”から“ボ”の発音で4半音の差は、1歳児には難しいものと思われる。

続く2ブロックと6ブロックはそれぞれ上行短3度から上行長2度の音程である。2ブロックでは正確に歌えたものはいない。しかし6ブロックでは半数が正確に歌えている。このことは歌詞が関係していると思われる。つまり前者は、『みずいろ』と1音符2音節で同音進行しながら短3度の移行である。加えて、同音進行の中でも少しずつ音高も揺れて歌われている。それがさらに長2度上行の『めが

ね』の“め”に結んでいく。日本語の  $m \rightarrow I \rightarrow z \rightarrow U \rightarrow I \rightarrow r \rightarrow O \rightarrow m$  E の  $I \rightarrow U \rightarrow I$  は構音形成の面から近い位置にあり自然移行しやすく、その為、前の音からより近い音に移行し、結果的に音程が狭められたものだと考えられる。それに比べて、後者は『とんだ』の歌詞である。つまり、後者は“ん”が撥音であり、鼻にかかった発声で自然に話すように歌うことが出来るわけである。このことが結果に表れていると思われる。

さて同じ短3度と長2度の下行の音程はどうであろうか。それが4ブロックである。ここでは『あおい お(そら)』の歌詞で下行する。歌い始めの音高はそれぞれ違っているが素直に3半音から2半音への移行がなされている。この歌詞はすべて母音であり、図1に見るように、“ア”と“オ”の発声時の声道の形状<sup>(2)</sup>はほぼ同じようである。その形状から“イ”音の発声に移るときに声道は狭められ、続いて“オ”の発音に落ち着く。この時の“イ”の発声は下行に向かっている。上行する“イ”の発声に比べて、喉への緊張はゆるめられる。そして“オ”に導かれる。以上のことから6ブロックでは半数の子どもが正確に歌えたのではないだろうか。しかしこれについては、他の歌詞による同様の検証が必要であろう。なお、この4ブロックについては、後述の2歳児、年少児の表れには別の興味ある実態が見られている。

さて前に戻って、3ブロックの完全4度である。約半数が5半音また4半音で次フレーズに移行できている。これについては保育者の歌の支えが大きく寄与している。保育者の支えの歌は、原調よりも短3度ほど低く歌われている例が多かった。それに対して子どもの声は保育者の音高よりも高くなったり、低くなったりしながら歌いきっている。保育者と一緒であることの安心感、更には保育者の声が旋律の流れを喚起することで、子どもたちは自分の声域の中で自然の形で完全4度に結ばれたものと考えられる。

一方、5ブロックは、『とんだから』の歌詞から『とんだから』と同じ歌詞へ移るフレーズの区切りである。ここでは長2度(2半音)の音高差であるにもかかわらず、6ブロックの最初の音は、1半音下または1半音上の音高から歌い始めている。そして続く6ブロック全体では、半数が正確な音程で歌っている。つまり、次のフレーズへ移るときに移調されて歌われているのである。この表れは、2歳児以降にも頻繁に見られる。

さて、曲尾は完全4度の5半音である。一人だけ正確であった。この事例は、曲の始めは先生の歌声で開始され、その後は自分から歌い出している。そして3ブロック以降はほぼ正確な音程を保って歌っている。この事例については対象児1名であることから今後の継続調査に繋がりたいと思う。

以上、1歳児について歌い始めから歌い終わりまでの音程の表れを見てきた。事例から推測できることは、1歳児は誰かと一緒に歌うことの喜びや模倣する楽しさを味わいながら、その中で少しずつ音高感が育っていくその準備期にあるということが言えよう。

## 2歳児

2歳児は、1歳児に比べて格段に声域も拡大している。音域の幅についても広がりを見せ、とぎれとぎれながらもなんとか曲全体を歌うことが出来るようになってきている。<sup>(3)</sup>

表2(1ブロック)に見るように、声域の拡大が長3度の跳躍音程から長2度の移行を正確にさせ、23.4%という結果を生んでいる。これは『もう いいかい』の呼び声遊びで表れる音高である。しかしこの呼び声は、遠くにいる友だちを呼ぶ時、また近くに友だちがいる場合、また感情が高揚している時等々その時々相手との関係により、完全4度～長2度になったり、短3度～長2度あるいは短3度～短2度になったりして表われる。音高感も以上のような遊びを通して学習されていくものであろう。

表3(2ブロック)では、正確に歌えたものは25.5%である。しかし、上行短3度は正確であっても続く上行長2度を上行短2度で歌ったものとは僅差(21.3%)である。このように半音差でぶら下がったり、上がったる例は多く見られた。このことから正しく歌えるように導く援助への可能性が秘められていることが分かる。伴奏、あるいは保育者の正確な音程での支えや範唱が如何に重要な働きをしているか、つまり望ましい歌唱指導のあり方について示唆を与えてくれるものである。これについては次への課題にしたい。

表4(3ブロック)は、フレーズのつながりの完全4度の音程である。5半音に至らず2半音が一番多かった。実際の歌い方を見ると極端に喉を締め付けるような大声での歌い方、また高音で歌い始めてしまった挙句ここにきて修正するもの、さらにフレーズの区切りの前で一旦休止をしてから歌い始めるものとその様相は様々であった。その結果、表4に見るように1半音から4半音の周辺での事例が多く表れている。正確に、5半音歌えた者のうちの3名は、表2(1ブロック)の4半音~2半音も正確に歌い始めている。しかし、2歳児の中で全曲を通して正確に歌えた者はいない。なお、表4のその他に属する事例は、曲の山に飛び込む所で喉が詰まり『あ』の発声が出来なかったもの、また高音を意識しすぎて6半音になったもの等が含まれている。このことから音高感は確かに芽生えているものと思われる。

次に表5(4ブロック)であるが、フレーズのつながりを5半音で通過した者は全員この音程を正しく歌っている。ここは、この曲の山である。最初の発声『あお い』を3~4半音の隔たりとして意識したものは、全体の43.3%である。ところが、曲の山から『お (そら)』の“お”の音高に落ち着くところで不安定になっている。つまり『あお い』を一気に歌いきって、次の“お”は一つ前の“い”と同音あるいは1半音の差で歌っている者が約30.0%いるのである。表5のその他に属する事例の中にも3半音~2半音の音程の移動ではなく、例えば「あ~い」の様に曲の山を一つのまとまりとして5半音また3~4半音の範囲で歌い上げている者もいる。またその他の事例の中で、最初の短3度あるいは続く長2度のいずれかに「？」がついた者は、40.5%の内の17.8%を占めているのである。このように「？」のつく箇所は表5が一番多く表われ、他のブロックでは2例しか見られないものであった。このことは、音高感、さらに曲の山の意識の芽生えが見られるという事を示唆してくれるものである。

さて表6(5ブロック)は、コーダに移るところの音程差である。実際には、2半音の上行で移行される。正確に歌えた者と半音差で歌ったものを合わせると70.2%になる。ここには2半音より僅か下、また1半音より多少高めの音高で歌っている者も含まれている。同じ言葉の繰り返して強調される歌いだしであり、この結果は1歳児と同様に予想していた通りであった。

表7(6ブロック)は、表3(2ブロック)と同じ音高の流れで構成されている。1歳児のところで述べたように表3は同音進行で短3度から長2度に移る音程である。そして表7は、撥音の歌詞を間に挟んでの進行である。3~2半音と3~1半音で歌った者をまとめると、前者(表3)は46.8%であり、後者(表7)は57.4%となっている。予想通り歌詞との関係で後者の方が歌い易いようである。この辺りの精査に関しては、他の題材(発音)での同様の調査を待たねばならないだろう。

最後の表8(7ブロック)は、曲尾の上行完全4度の音程である。正確に歌えたものは僅かである。ここでは2半音(長2度)でまとまる者が38.3%と一番多い。続いて1半音(短2度)がそれに続き、両者を合わせると55.3%と半数を占めている。これについては、前小節と同じ言葉の繰り返しであることがその要因であるとも考えられる。つまり前半の『とんだから』の“から”は長2度の隔たりである。従って後半も同じ音高として捉えられたものと思われる。しかしその中で、正確に5半音また1半音狭い4半音で終止した子どもも25.5%いる。曲全体の音程のすべてを正確に歌えた子どもはいなかったが、数ヶ所の音高の間違いはあるが、しっかりと歌えている子どももいるのである。

2ヶ所1名(2.1%)、3ヶ所3名(6.4%)の音程の表れを、1歳児の表1に習って表記すると次のようである。( )は正確 ○は不正確

- |         |         |     |         |     |         |   |
|---------|---------|-----|---------|-----|---------|---|
| (4) (2) | (3) ①   | (5) | (3) (2) | (2) | (3) (2) | ④ |
| (4) (2) | (3) ①   | ①   | (3) (2) | (2) | (3) (2) | ④ |
| (4) (2) | (3) (2) | ②   | ② (2)   | (2) | (3) (2) | ② |
| ③ ①     | (3) (2) | (5) | (3) (2) | (2) | (3) (2) | ③ |

さて、2歳児についてまとめると次のことがいえるだろう。

2歳児にとっての歌とは、声という自己表現の手段を手にして、声の性能を操作する仕方を学習するための一つの道具といっても過言ではないと思われる。言葉の発声を一つの旋律にのせて、柔らかい声や、大きな声や、怒鳴ったり、力んだりする声で自己を表現している段階であると捉えることが出来る。自分で表現できる音高で歌ったり、それとは全く関係のない音高になったりと、この過程を通してだんだんコミュニケーション手段としての言葉と歌の分離がなされていくのではないだろうか。1歳児までの準備期間を経て、2歳児は音高感の芽生えを育てていく出発点に立ったという事がいえるだろう。

### 年少児

年少児は、歌と話し言葉が分離し始め、歌うという行為に向かって挑戦していく姿が伺われた。また、声域の幅についても2歳児では、減5度から長・短6度までに位置することもが70%に対し、年少児では男女ともに長・短7度、更にオクターブあるいはそれ以上の声域を持つ子どもが増加している。<sup>(4)</sup> このことが以下の結果に反映されている。

まず、表2(1ブロック)に見るように、正確さにおいて2歳児よりも上回っている。またここでは、名前を言ってから歌い出そうというところで出だしがスムーズにいかず、最初の部分で息つきをしてから『めがねは』と歌い出した子どもが2.3%ほどいる。しかし、この子どもたちはその後最後まで歌いきっている。一人でマイクの前で歌うという行為が精神的なプレッシャーとなっていることが分かる。

表3(2ブロック)についても、2歳児より正確に歌えている子どもが多くなっている。特に、『みずいろ めがね』の“め”の音高が意識され、高音を怒鳴り声で叫んでいる2名を除くと全員が前音より高く歌っている。1半音だけ高く歌った子どもは約4割弱であり、2半音以上の隔たりで歌った子供は約6割強である。ことばへの意識が音程に影響しているということが見えてくる。

次の表4(3ブロック)についても音高感の芽生えが見られる。ここでは、フレーズの区切りで自分の歌の調子を整えている。2歳児には見られなかったが、低音で歌い出しここで6半音あるいは7半音まで高めて歌っている子どももいる。つまり、無伴奏の場合、全曲を思い浮かべながら歌うのではなく、自由な音高から歌い始めその時点時点の流れの中で、音高を調整しながら歌っているのではないかと考えられる。

表5(4ブロック)は、前のフレーズから完全4度の跳躍で曲の山を迎える。ここでの下行短3度と下行長2度は、年少児にとってとりやすい音程であろうと思ったが、予想に反して正確に歌えた割合は21.2%であった。課題曲の1番高い音(曲の山)であることがネックとなったのであろう。これが例えば「チューリップ」や「ぞうさん」の歌にあらわれる短3度から長2度の音程であったとしたらどうであろう。今後の検証が必要である。

さてこのブロックについては、年少児になって別の側面も見えてきている。2歳児までは見られなかった表れである。それは加齢に伴う歌唱経験の積み重ねや言語発達が音程にも影響しているという事である。つまり、この歌詞は『あおい おそら』であり、原曲は“あお”は同音、“い”まで短3度、そ

して“お”へ長2度で流れる。しかし、“あ”・“お”・“い”を言葉のアクセントに合わせて1音ずつ音程を変えて歌う例が多かったのである。例えば半音数で表すと以下のようである。

「例」あ お い お (そら)

2-3-2            1-3-1            2-3-0            3-4-1

また更に、これは2歳児にも見られたが『あお い』まで一気に歌ってしまうと次の“お”の音程が“い”と同音になってしまう例も27.3%にのぼっている。

さて次の表6(5ブロック)は、2歳児とほとんど変わらない。同じ言葉の繰り返しによるコーダであり、この音高差は子どもにとってあまり意識されていないものだと考えられる。しかし、年少児になって、この強調を4半音あるいは5半音また7半音まで高くして締めくくる子どもも7.7%いる。この辺りにも年少児の歌うという行為に向かっていく姿を見る事が出来る。続く年中児や年長児ではどのような表れが見られるのであろうか。次回の内容である。

続いて表7(6ブロック)は、コーダの部分である。その表れを見ると、2歳児と同じような傾向である。表2との比較においても、やはりこちらの方が正確に歌えている。前述のように歌詞の側面が大きく関係していると思われる。

表8(7ブロック)は、曲尾の完全4度である。これも少しずつ2歳児よりも正確に捉えられてきているが、やはり前小節の『とんだから』の“ら”の音高が影響しているのであろうか、長2度の音程で締めくくっている子どもが多い。長2度と短2度を合わせると52.9%である。2歳児でも55.3%と約半数がここに属している。特に表4(3ブロック)に現れる完全4度の音程と比較しても後者は2半音で歌われた数が多くなっている。しかし、曲尾のまとまりを意識して完全4度で歌っている子どもも表4よりも僅か3.4%であるが増している。歌としての形を整えた歌い方が出来る時期を迎えたと考えられる。

以上、年少児の歌を通して音高の表れを見てきた。前述のように、歌全体を捉えて歌うというより、歌の流れの中で自分の歌いやすい音域に合わせながら言葉を口ずさんでいるという姿が見えてきた。しかし、2歳児との対象数の違いで断定は出来ないが、全曲を通して正確だった子どもは2名(0.7%)、僅か1ヶ所だけの違いは14名(4.7%)、2ヶ所は14名(4.7%)であった。これらを合計すると30名(10.1%)であり、2歳児は1名(2.1%)ということになる。年少児になって確実に歌う能力は芽生えてきていると考えられる。

以下、表1の音程の表れに沿って、1ヶ所だけ違った音程で歌った事例を挙げてみることにする。複数該当あり。( )は正確 ○は不正確

(4)(2)	(3)(2)	④	(3)(2)	(2)	(3)(2)	(5)
(4)(2)	(3)(2)	(5)	(3)(2)	③	(3)(2)	(5)
(4)(2)	(3)(2)	(5)	(3)(2)	(2)	(3)(2)	④
(4)(2)	(3)(2)	(5)	(3)(2)	(2)	(3)(2)	③
(4)(2)	②(2)	(5)	(3)(2)	(2)	(3)(2)	(5)
(4)(2)	(3)(2)	③	(3)(2)	(2)	(3)(2)	(5)

以上を眺めてみると、完全4度の音程の部分でつまずいてしまった様子がうかがえる。なお、資料を精査するとつまずきの箇所は、フレーズのつなぎや曲の山に表れている。歌唱指導への示唆を与えてくれるものである。

さて以上のように、年少児は、単に言葉に音高がついたお話をするような歌い方から、歌を歌うという行為に向かって楽しむという姿が伝わってくる。まずは歌う喜びを満喫させながらの望ましい発声の指導を得て、正確な音程で歌える技を獲得出来るような学習が用意される最初の時期を迎えているとい



えよう。

## まとめ

子ども一人一人の歌う「とんぼのめがね」の録音テープを聞きながら、1音ずつピアノのキーにのせて採譜する作業は非常に楽しくもまた困難であった。ピアノの音高とは僅かに下がったり上がったり、また1音を発する際にポルタメントのように揺れ動いたり子どもの歌の実態を目の当りにして、子どもたちはどのように歌いたかったのだろうかとその答えを見いだす為に、一人の子どもの歌を何回も聞き直したのである。その上で前後の流れや発声の状態などに配慮しながら、結果に示したようにまとめてきた。

さて、結論に入る事にする。

1歳児は、歌う（音程）の意識よりも、保育者の歌に助けられて「とんぼのめがね」という曲を媒介として一緒に口ずさむ心地よさを共有しながら楽しんでいる姿を見る事が出来た。ここでは、大人の捉える出来上がった歌という範疇ではなく、言葉に音高やリズムがついたいわば言葉遊びの段階である。つまり、音高を追うというよりも1音1音そのものの発音を楽しむという姿である。このことは、保育者の歌い方、扱い方によってはその発達を促す鍵が秘められているという事でもある。

2歳児は、歌という媒介を通していろいろな発声を確認しているという姿があった。特に、低い音高よりも高い音高という意識が芽生えてきている。例えば、曲尾の5半音では、4半音以上の隔たりとして捉えている子どもが27.7%いるのである。しかし、高い音高では喉を締め付けるような大声や叫び声での表現や、高音を意識するために声が詰まって発声出来ないという例も多く見られる。大声で歌う事も音程がとれない一つの理由である。無理のない発声指導の中で、音程への意識を育てていく事が大事であろう。また更に歌唱経験の多少も大きく影響してくる。日常の話し声や絵本などの読み聞かせやそのやり取りの中で、声という表現方法に目が向けられる事が重要であると考えられる。

年少児は、旋律の流れを意識して少しずつ歌らしい様相を整えた表現に向かっている姿を読み取る事が出来た。フレーズ毎に音高を調整し、小節毎に音程を合わせながら歌っていることも見えて来ている。更にまた、言葉の発達や遊びの中での音楽的行動の広がりなどが、歌の中に散りばめられており、歌唱技能は、そのものが独立して発達するものでない事を教えてくれた。この広がりの中で、少しずつ自己表現手段としての歌の役割の大きさに気づき始めている事も伝わってきた。歌のみならず、全領域的な発達を促していく適切な環境が用意される事、それが非常に重要な意味を持っているというのが年少児ではないだろうか。

さて今回は、1歳児・2歳児・年少児を対象にしてきた。次回は年中・年長児であるが、対象者数は400を超える。前述のように年齢を追う毎に歌ばかりではなくいろいろな体験を重ねている年中児・年長児である。更に分析も複雑を極める事が予想される。一生懸命私たちに歌ってくれたこの子らの声に答えていきたいと考えている。

## 引用・参考文献

- (1) 大畑祥子 1987 『音楽的能力の発達』「子どもと音楽」所収 同朋舎 pp123
- (2) 養島 高 1969 「音楽生理学」 音楽之友社 pp217
- (3) 武田道子・加藤明代 2003 『乳・幼児の歌唱能力の発達に関する一考察Ⅰ～声域調査の分析を通して～』 静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)第35号
- (4) 武田道子・加藤明代 2004 『乳・幼児の歌唱能力の発達に関する一考察Ⅱ～発声調査の分析を通して(1)～』 静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)第36号
- (5) 藤田竜生 1976 「リズム 日本人の音感覚とリズム」 風濤社
- (6) ロザムント・シューター著 貫 行子訳 1968 「音楽才能の心理学」音楽之友社
- (7) 森きみえ 1990『幼児の歌唱能力に関する研究』日本保育学会研究論文集 第43回
- (8) 長澤佳子・植田恵理子 1994 『幼児の歌唱能力の分析～幼稚園年少児の独唱時における音程の検証～』 日本保育学会研究論文集第47回
- (9) 志村洋子 1981 『幼児の歌唱能力とその指導に関する研究(その1)』 埼玉大学紀要 教育学部(教育科学)第30巻
- (10) 武田道子 1996 『現代“ふしことば”論—その教育的意義と学理的検証—』静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)第28号